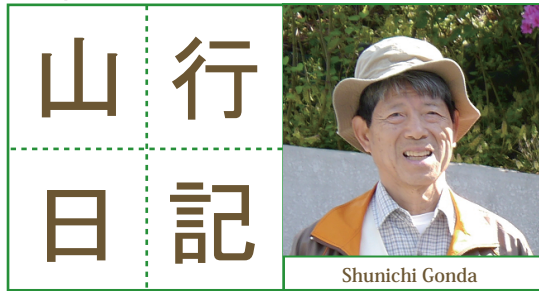


権田俊一の



Mountain.7

## 「六甲山」

六甲山（ろっこうさん、931米）は、大阪湾に面し、神戸の北側に連なる峰々の最高峰だ。最高峰の標高は千米に満たないが、10キロメートル以上にわたって連なる主稜線は存在感がある。私の住んでいる宝塚は六甲連山の東の端に位置し、六甲全山縦走大会の終着点でもある。自宅から近いこともあって六甲山にはたびたび足を踏み入れてきた。

私が大阪大学に着任したのは、1984年秋だが、宝塚に住むようになったのは85年4月からである。翌年隣の研究室に中島尚男さんが教授として着任した。その年、新入生歓迎会を兼ねて権田研究室と一緒にハイキングとバーベキューをしようということになった。場所は図でテント場と書かれたところである。参加者十数人のほとんどは神戸側から登り、主稜線を越えてテント場にやってきた。私と誰かが有馬側から林道を車で行き、バーベキューの道具や材料を運びあげたのである。もちろん私は下見をしたので、これが足を地に着けた六甲山との係わり合いの最初である。なお、二年後の1988年には権田研で、瑞宝寺谷の太鼓滝に遊び、瑞宝寺公園でバーベキューをした。



六甲山

1990年の冬、前の妻啓子や子ども達と一緒に、百間滝へ行ったことがある。左下の写真、まるで極地探検隊だ。図に示したように、滝は有馬側にあり冬には滝が凍ることがある。1月28日(日)に行ったときは、丁度凍っていて、氷壁を何人かが登っていた。右下の写真。それを眺めて楽しみ、帰りに沢沿いの雪道を歩いていたら、中学生だった長女の裕子が滑って沢に落ち、下半身ずぶぬれになった。氷の張る季節である。さぞ冷ただろうと、なんとかしようとしたら、大丈夫だといって、そのまま家まで帰ってきた。若さとはすごいものである。



家族で百間滝見物 1990年



百間滝の氷瀑 1990年

翌年 1991 年の 5 月に小学生だった次女の朝子、息子の州人（くにと）、それに犬をつれて、また紅葉谷を通して百間滝へ行つた。今度は百間滝の上部の道なき道を、木につかまり岩をよじ登りながら歩いた。最後に、地図の一軒茶屋と極楽茶屋の間あたりの道に出た。ありきたりでないことをやり、二人ともまんざらでもなさそうだった。もっとも犬はどうだったかわからない。ひょっとしたら一番喜んでいたかも。

その後、東お多福山へ行ったときのこと。森の一部の開けたところで、食事をしていた。近くでは遠足で来た小学校低学年の生徒達がやはり食事をしていた。突然、キャーという叫び声。見ると近くをうろうろしていたイノシシが生徒のリュックサックをくわえて走っている。先生があわてて追いかけ、どうやらリュックサックは取り返したが、リュックサックは傷だらけだった。イノシシには注意しないといけない。

ロープウェイの六甲山頂駅の近くにはスキー場がある。家族みんなで行ってスキーを楽しんだ。まだ自然の雪は降っておらず、コースのところだけ人工雪があり、かわった感じだった。

六甲山についての昔話を書いているときりがない。本題に入ろう。なお、前の地図にある湯槽谷山を含む有馬三山、荒地山、摩耶山については別に紀行文を書いている。

ここに書きたいのは、2014年5月6日の山行である。いままで百を越える山の紀行文を書いてきたが、妻や子どもたちとの山行はあっても孫との山行がない。私は5才のとき、母親に連れられて草津白根山に登った。これは強く印象に残っていて、よい思い出になっている。小さいうちに、有名な山に登っておくといいのではないか、それに自分も今年は78才になる。これから先、そう長くは登れないだろうから今のうちかな、というのが動機だった。

相手はこの年、小学校に入学した次女朝子の長男健生（たける）である。父親の勝仁君が同行してくれることになった。勝仁君は先述の阪大中島研究室の卒業生である。縁は異なるものである。山行の目的からすれば、山はよく知られた山で行きやすいところがよい。六甲山はいろいろ峰があるが、やはり最高峰がいい。そして登りやすいルートがいい。それに朝子や長女の楓子（ふうこ3才）、次男の駿（すぐる0才）が一緒に来て待っている場所が必要だ。このような条件から、有馬温泉のロープウェイの駐車場に車を止め、魚屋道を登って最高峰に行き、最高峰からロープウェイの六甲山頂駅に歩いて朝子達と落ちあう。妻の伸枝は健生達と一緒に登らず、六甲高山植物園に行つて絵を描く。食料を持って行き、山頂駅の近くで一緒に食事をする。食事するだけではつまらないから、そこでご飯を炊いて食べるということにした。六甲山は道路も張り巡らされているし、ロープウェイもある。こういうイベント的なことをやるにはもってこいのところだ。

湯山稲荷大明神の鳥居と祠がある登山口にみんなが着いたのは8時50分ころだった。楓子が転んで怪我をし、手当てをしたりしたので、実際に出発したのは9時を過ぎていた。出発点には「杖捨て箱」という立派な箱がある。下つてきた人が杖を捨てる箱だ。中には木の枝の杖が入っている。由来を見ると、昔、有馬温泉へ杖をついて来湯した湯治客は、有馬に来るとみるみる元気になり、帰りには杖がいらないくらいになったという。有馬温泉の六甲川にかかる杖捨橋の由来にもなっている。その言い伝えを踏まえてここに杖捨て箱を置いたようだ。勝仁君と健生は箱から杖をとりだし、それを使って歩き出した。朝子は駿を抱いて途中まで見送りにきた。伸枝は楓子をつれて近くの「かんぼの宿」に遊びにいったようだ。

出発点には、「六甲山頂上二到ル三七二六メートル、住吉二到ルー二四一三メートル」と書かれた古い石の道標がある。頂上に続くこの魚屋道（ととやみち）は、江戸時代有馬温泉に神戸（魚崎）の魚を運ぶために使われた道。明治になり県道有馬住吉線として整備され、明治7年に大阪神戸間に鉄道が開通すると住吉駅が有馬温泉の最寄り駅になり、徒歩、馬、加籠による交通が盛んになったという。そのため、魚屋道は傾斜をゆるくするためジグザクにつくられていて歩くのは楽だ。この楽だというのが、私の狙いだったが、子どもにとっては退屈な道だということを忘れていた。途中の樹木や草花には関心がないので、興味の対象がないのである。そこでジグザグ道を下から上へショートカットしている踏み跡に登り始めた。道が曲がって上に本道が通じている場合はいいが、曲がらずまっすぐ道が進んでいる場合はひどいことになる。道の様子を知るのはいまは楽だ。勝仁君はスマホのGPSを見て、ショートカットの道が本道に出る場合に限って健生にゴーサインを出した。場合によっては勝仁君も後を歩いた。その後、ジグザグは少なくなり、歩きやすくなった道を歩いて昔の峠の茶屋跡に着いた。9時45分だった。45分は休憩なしで歩いたことになる。茶屋跡には、今は休憩場所がある。ここでしばし休憩。さらに、ブナやイヌブナ、ツツジの咲く道を歩いて、吉高神社が右下に見える場所に着いた。ここまでくれば頂上までもうすぐだ。健生はすこし道から下ったところにある神社に駆けていった。好奇心旺盛、興味あるものが出てくると元気になる。神社からはすこしの歩きで舗装道路にでる。一軒茶屋だ。ここは山中を車が走る舗装道路があり、人が急に多くなる。広い道を登ると、六甲山最高峰だ。11時に着いた。途中いろいろなことをやったにしては、わりにはよい時間だ。



六甲山最高峰で 2014 年



六甲山頂駅の前で食事

頂上には大きなアンテナがある。人もたくさんいたが、驚いたことに、勝仁君の知人も奥さんと子どもを連れてきていた。左の写真はその知人に撮ってもらったものである。

これで一段落と思ったら、大間違いだった。最高峰からロープウェイの六甲山頂駅までは前の地図にあるように比較的距離が長い。舗装道路はかなり高低差がないようにつくられているが、登山路は忠実にピークを登って行く。一人で歩くとなんともない道だし、伸枝にもウォーキングシューズ、スカートでこの道を歩かせたことがある。体力を消耗していた健生にとっては、このアップダウンはこたえたようだ。たしかにこれは孫を連れて歩くときの反省材料だ。でも文句を言いながらも、どうやら六甲山頂駅に着いた。12時15分で、食事に丁度良い時間だった。

伸枝や朝子たちはもう着いてマットを広げていた。みんなで高山植物園へ行ってきたという。伸枝は絵を描くまでには至らなかったようだ。早速伸枝がつくって山頂駅まで抱えてきたご馳走を食べる。私はザックにいれて背負ってきた米、コッフェル、バーナーを出して炊飯だ。みんなの分、全量を炊くと時間がかかるので、大半は伸枝の持ってきた炊き込みご飯。しかしこの場で炊いたご飯は適当におこげもできて味は好評。これも孫たちと登る登山の醍醐味だ。

下りは、極楽茶屋から紅葉谷を歩くつもりだったが、健生のストライキにあって断念。みんなでロープウェイで下りた。すべては最初の地図のGPS軌跡の黄色の線が物語っている。